



義太夫協会々報
第28号
昭和58年8月26日
社団法人 義太夫協会発行
〒104 東京都中央区銀座
6-18-2 新橋演舞場B2
TEL (541) 5471

義太夫協会と義太夫節保存会

—両者の関係と任務の分担—

義太夫協会会長 吉川 英 史

先般、義太夫協会の役員改選を前に、協会の副会長豊澤仙広さんは、高齢を理由に次期の役員を辞退すると申し出られた。同時に役員若返りを希望された。この意志を尊重して、理事も若干若返り、副会長も竹本朝重、竹本駒之助の二人が選挙された。

それに続いて、役員の事務分担も、各自の希望を入れながら、適材適所に配置されるなど、義太夫協会の態勢の改善強化は、前副会長の希望にもそい、かねてよりの監事の勧告にも応ずる結果となった。

この新体制出現の機運を作られた前副会長に感謝すると共に、この誌上を借りて、永年にわたり義太夫協会に物心両面の貢献をされ

たことに対し、協会員全員の感謝の意を表する次第である。この意味において、前副会長に名誉会員の称号を贈ることを、総会が決議した。

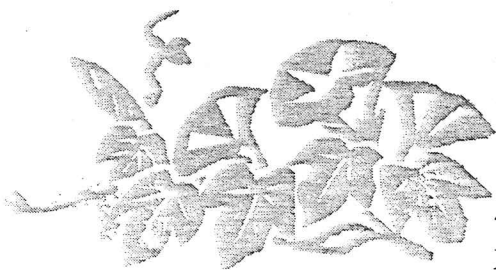
ところで、豊澤仙広さんは、このように義太夫協会の理事および副会長を辞退されたのであるが、義太夫節保存会の会長は、従来通りであることは無論である。そこで、この際改めて義太夫節保存会と義太夫協会との関係を考えてみたい。義太夫人でさえも混同されることがあるようである。

義太夫節保存会（以下「保存会」と略称）は、重要無形文化財の団体指定を受けた文化庁の公認団体であるのに対し、義太夫協会（以

下「協会」と略称）は東京都公認の法人団体である。保存会の会員の資格は、協会の会員よりも永い芸歴が条件となっている。そのため、協会の若手の会員は、保存会の会員にはなれない。

次に、保存会と協会とは、目的が違っている。保存会の目的は、芸の保存と伝承にあるが、協会の目的は、芸の普及と発展にある。そのため、保存会は若手の育成・稽古・特に伝承曲を正しく伝えることが重要な任務である。それに対して、協会は演奏会や講習会などによって、義太夫節の鑑賞人口を増加することが任務なのである。

文化庁の係官の説明によれば、「例えば、義太夫専門の若手の育成・稽古や、その成果を発表する年に一、二回の義太夫節保存会主催の演奏会などは、保存会の仕事です。毎月の本牧亭の公演や義太夫教室や学校巡演などは協会の仕事です。」（2頁下段へ）



ごあいさつ

残暑お見舞申し上げます。

義太夫協会も若手の太夫・三味線が二十人以上にもなりすっかり若返りました。本牧亭のお客様も若い人がみえるようになって賑やか、七月は大入満員の盛況。二十日、吉川会長のお話も、三ヶ月ぶりの土佐広師「宿屋」も皆様に喜ばれました。二十一日は、新しく副会長に選ばれた朝重・駒之助の「壺坂」三味線は幸治。三人そろった舞台は大変きれいでお客様も御満足でした。九月にはまた目新らしく、ドウスル連時代の昔の義太夫と、女流初の間国宝が誕生した現在の義太夫というようなテーマで、役員一同企画をねっております故、九月二十九日の国立公演は、きつと皆様に喜んで頂けると思います。

昨年の六月二十九・三十日、人形浄瑠璃因協会の主催で、土佐広、人間国宝、仙広、勲四等叙勲の祝賀公演を盛大にして頂き、何時天国旅行をしても思い残すことはない程の喜びを感じ、大阪三越の舞台からお客様にお別れの御挨拶を致しました。ひき続き九月には東京の国立劇場で祝賀演奏会と決っていたのですが、

義太夫節保存会会長 豊澤仙広
義太夫協会前副会長

私が脳の手術という大病を致しましたので取りやめになりました。今日までもまだ舞台出演は禁じられて居ります。

いくら昔に変わらぬ元氣になりましたも、八十四歳の耳では三味線の調子が思うにまかせず、このたびの役員改選でこの辺が退きどころと、十二年間つとめた副会長を辞任致し、朝重・駒之助という若い副会長が誕生、協会もすっかり若返りました。皆様にもさぞ喜んで頂けたことと、私の辞任おそかりしと感じております。二人の副会長は人格も良く、勉強家ですから、先輩の見守る中、よく会長を助けて今後の協会を益々もりたてることと確信致しております。若返った義太夫協会の御後援を伏してお願ひ申し上げる次第でございます。

私の保存会会長としての役目は、芸の伝統を正しく守り後世に伝えること、若手の勉強の場を保証すること——若い後継者が立派に後を継いでくれる日まで元気でいたいとお祈りする今日この頃でございます。

暑さのみぎり、皆様、御自愛下さいませ。

(1頁下段より)

非常に明快な説明である。しかし、永い間協会一本ですべての仕事をしてきた関係もあり、内部の人は、急にこのように明快な区別はできにくいかもしれない。そこで、本牧亭の公演を全部協会の主催とせず、年二回くらいは、本牧亭の公演も、保存会主催の公演とするのが、実情に即したやり方であろう。

なお、来る九月二十九日の国立小劇場における「女流義太夫の今昔」の公演は、芸術祭にさきがけての快挙として話題となっているが、この公演は保存会の主催として、企画が進められている。

この「女流義太夫の今昔」では、明治・大正時代の寄席における娘義太夫の舞台と客席の再現と、現在の女流義太夫が披露する本格的な女義の芸が対比的な効果をあげるだろう。しかも、その本格的な女義として出演するのは、人間国宝の女義一号・土佐広師と、大阪女義界の重鎮・染登師というから、前人氣が高いのも当然である。

しかも、国立劇場の舞台機構を活用しての「野崎村」の新演出、津軽三味線の合奏をしのごく太棹の大合奏(ツレ弾き)が企画されているという。司会と説明役に三國一朗氏の引き出しにも成功したそうである。当日の盛會を祈る。



豊竹団司の芸

内山美樹子

豊竹団司という名人の存在を、筆者がはじめて知ったのは、昭和四十三年春であった。関西在住の団司の浄瑠璃を、東京で聴く機会は稀であったし、NHKでもその頃は、文楽はBK、女義はAKという分担にでもなっていたのか、団司・小住の放送は、ほとんどなかったように思う。今でも先学の方々が、まだ団司の浄瑠璃を聴く機会がない、と言われることがある。

当時十世豊竹若大夫の床年譜を作成しつづけた筆者は、義太夫協会相談役の高野俊雄氏御所蔵の若大夫関係資料を貸していただくために、同氏のお宅へ伺った。故慎子夫人が、その時、若大夫関係の資料に添えて、団司・小住の「先代萩御殿」「時雨の炬燵」の録音テープを、「女越路といわれる名人です。ぜひ一度お聴きなさい」といって、貸して下さった。実をいうと筆者はその時、文楽以外にあまり興味がなかったので、高野夫妻の御好意は有難迷惑にも思われたのだが、ともかく、帰宅して、未知の女義の「先代萩」を聴きはじめた。

マクラが済んで、政岡の詞、最初の「はい」で、団司は異常に長い間をとった。おや、と思った瞬間、鋭く、かぶせるように次の「は

い」が発せられた。きわめて個人的な、しかも曲中人物と一体化した時間と空間がそこにあった。浄瑠璃の間とはこういうものか。難しいといわれる「先代萩」の「はい。はい」が、まさにその難しい関門を突破して芸としての生命の躍動をはじめのさまを、まのあたりに見る思いだった。それからは、録音でも何でも、団司の浄瑠璃を聴くように努めた。団司師に直接話をうかがう機会にも恵まれたが、団司・小住の生の舞台に接するには、四十五年十月国立劇場の「桂川帯屋」まで待たねばならなかった。

「帯屋」のお絹とお半それぞれの「長右衛門さん」は「帯屋一段」の死命を制する詞と言われるが、それを実感せしめるような舞台には、筆者の年代では、接したことがなかった。たとえばお絹——大概の太夫（或いは俳優）は、この「長右衛門さん」は大事な文句だ、と意識して言うので、芝居らしくなる。そしてお絹が必要以上にきれいになる。が団司のお絹は別に美人ではない。「十年連添う女房の手前。立たぬ事も何もいらぬ」とずばり言っている。頼もしい、多少興味憎臭い、世話女房である。従って「長右衛門さん」も、少しも改まった言い方ではなく、日常生活に

おける習慣的な呼びかたにすぎないのだが、それだけに、この夫婦の生活断面が鮮やかに浮き出る。夫のすべてを受け容れ、許しているはずのお絹が「私も女子の端じゃもの。大事の男を人の花。腹もたつし」で、突然激しい憎悪と執着をむき出しにする。十年連れ添う女房の赤裸々な一面である。このお絹と、あまりにも初々しい、十四歳の少女お半との対比は、残酷ですらある。

九十を過ぎた今日まで、団司の描く人間像には、枯淡の境地などはほど遠い、生々しい愛憎や、ひたむきな情熱のほとばしりがある。そして何よりも、常に新しい発見がある。昨年六月、大阪三越劇場で「明烏山名屋」を聴いた。今まで髪結いのおたつと、親切だが、本人が「わしがよくなみつとむない女子でも」というからには、色気のない、くすんだおばさんなのだろうと思っていた。ところが団司のおたつは、そういうイメージとは似もつかぬ、若々しい魅力的な女性なのである。これでは、浦里が二人になってしまふのではないかと、心配になったほどだが、団司の浦里にはまた、恋する女独特の恍惚と張りつめたものがあって、おたつが如何に魅力的な女性でも、ヒロインにはならないのである。

明治三十九・四十年頃、すでに三代目越路太夫に擬せられ、我々若い世代の聴衆にとつては伝説上の「名人の時代」を現実生き続け今日に至っている女越路団司は、まさに現代浄瑠璃界の師表であり、今回、ギネスブック掲載によって、その存在が世界的に知られるようになることは、日本文化のためにも慶賀すべきであるといえよう。

(早稲田大学文学部教授)

昭和五十八年

通常総会終了

仙 広 副 会 長 辞 任
 新 副 会 長 は、朝 重・駒 之 助
 土 佐 広・仙 広 両 師 は 名 譽 会 員 に



去る六月二十七日、文明堂築地店にて通常

総会が開かれました。五十七年度事業報告・収支決算報告、五十八年度事業計画・収支予算案は全て異議なく承認、任期満了に伴う役員の変更が行われました。席上、豊澤仙広師より「衰微した本牧公演を復活し、もう一息頑張りたいが、何としても年齢には勝てない。今後は若い人が推進力となって大いに働いて頂きたい」との副会長辞任の意向が発表され、出席者は全員、同師のこれまでの業績、今回の勇退に賛辞を惜しまず、今後の責任の重さを痛感したことでした。

総会及び理事会・常務理事会を経て、新役員・各業務分担が決定、今後三年間次の通りのメンバーで運営することになりました。何卒よろしくお願い申し上げます。

尚、豊澤仙広・竹本土佐広両師は、故竹本土佐師に次いで名誉会員となりました。来る九月二〇日、本牧亭公演席上にて感謝状を贈呈することが決っています。

役 職	一 覧 (各五十音順)
会 長	吉川 英史
副 会 長	竹本 朝重
常務理事	竹本綾之助
理事	竹本 越道 竹本 弥乃太夫 竹本 綾一 竹本 扇太夫 竹本 喜久太夫 竹本 駒竜 竹本 春華 竹本 土佐恵 竹本 素八 竹本 米太夫 豊澤 幸治 豊澤 幸純 野澤 吉平
監 事	佐々木明郎 鶴澤 重造
相 談 役	豊澤猿三郎
参 事	竹本 国太夫 竹本 越孝 竹本 越若 竹本 素丸 竹本 團生 鶴澤 寿治郎
事務局	竹本 綾太夫 水野 悠子

業務分担 (責任者太字)

- 一、研修部 (技能向上及び後進育成のための機関)
 1. 本行部門 **竹本 素八**・野澤 吉平
竹本 駒竜・豊澤 幸純
 2. 舞踊部門 **竹本 弥乃太夫**・竹本 綾一
竹本 扇太夫・竹本 米太夫
 3. 歌舞伎部門 **竹本 国太夫**・鶴澤 寿治郎
- 二、普及部 (義太夫教室・学校巡演・教師のための義太夫講習会)
 1. **竹本 朝重**・竹本 駒之助
竹本 素丸・竹本 朝代
豊澤 仙離・野澤 錦鈴
- 三、公演部 (各種公演会の企画)
 1. **竹本 綾之助**・竹本 越道
竹本 朝重・竹本 喜久太夫
竹本 駒之助・竹本 土佐恵
豊澤 幸治・竹本 越孝
豊澤 仙鳳
- 四、編集部 (会報その他)
 1. **竹本 綾太夫**・竹本 團生
野澤 錦鈴
- 五、資料・記録部
 1. **豊澤 幸純**・竹本 越若
竹本 素丸
- 六、経理部
 1. **竹本 弥乃太夫**・竹本 越若
竹本 越君・竹本 重光
竹本 春華・竹本 朝重
竹本 綾太夫・竹本 駒之助
竹本土佐菊
- 七、渉外・広報部

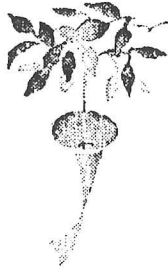
顧問 齊藤 正 (*印 新規又は変更)
佐伯 勇 (近畿日本鉄道KK社長)
坂本 朝一 (日本放送協会顧問)

田中 義男 (元文化財保護審議会会長)
坪内 士行 (研究評論家)

常任相談役 横山 敏雄 (東海大学総長)
河野 国声 (大阪トヨタ自動車社長)

相談役 鈴木 一光 菅 邦夫 *
高野 俊雄 * 田中 一郎
松尾 武市 * 中島 古平 *
松岡 語松 中村初波奈
榎本山喜雄 * 平井おひろ
景山 正隆 藤田 昌子
佐々木英之助 宮脇雪むら

竹内 道敬 * 渡辺 兼佐 *
寺中 作雄 和田 博 *
姚田 圭子
山岡 知博 *



豊竹団司師 おめでとうございます

— 現役世界最高齢芸能人 公認世界記録 —

「世界最高齢の音楽家と認めます」。九十二歳で義太夫を語り続けている女義太夫・豊竹団司さん。兵庫県尼崎市塚口町に宅へのこのほど、ロンドンのギネス本部からこんな認定通知が入った。五十九年度のギネスブックに掲載される(7月31日、朝日新聞朝刊より)。去る八月七日、編集子は団司師にお目にかかり直接お話を伺う機会に恵まれました。以下はその時の聞き書きです。

……それだけ世の中が変ったんですね。あんまり発達して浄瑠璃や古典はあんまり好かんようになったんやろ、むつかしいし。

同じことばかりでなく、少しでも変るようになっていかな、時勢に応じての仕事せな発展せんわな。時節まって若い人に苦勞して貰わな……年寄りがいつまでも出しゃばって古くさいこと言ったらどんなもんでもアカン。みんなで相談の上、今までと違うことして貰わな。浄瑠璃のやり方を変える——そんな訳にはいかんけど、これなら人が判るやろ、これなら人が面白がるやろという所をこしらえるよう師匠と相談して、あんた方の努力で盛り返して貰わんことには。

範圍が狭いのんや。昔のようにどこでも行く先々で出来たら一年中いけるのやけど。席がないから年中休んだらならん、商売やめならん。やる方もやる方やけど、聞く方の筋が違うて手のつけようがない。子供のときから見たり聞いたりするから判るけど——むつかしいこっちゃ。今は、好きな人は自分で弾いて楽しむ、時代が変ったから難儀なこっちゃ、我々ではどうにも変えられへん。

(本牧公演の三味線奏者の減少にふれて)

大阪から一人二人、毎月来て貰うようにしたらどうやろ。本牧大事にして潰すことはでけへん。どないなとしてこっちから応援に行く。本牧は毎月やってくれる、日本国中にあそこだけや、東京なりやこそ続いている。潰さんようにしつかりハタがつかまえてかないかん、二人ずつで間に合うのや。潰したら恥や。本牧は勉強の場としておいて、あとは日本国中行ったらエ、東京に坐ってるだけはいかん。あっちこち行けば自然に子孫も増える。好きも嫌いもない、聞かさない流行っても流行らいで……チリヂリバラバラはあかん。みんなが気持を一つにして、一生けんめいにきばらないかん。若い人の働き時や、自分達のことやさかい、しつかりやうて貰うよう頼んまっせ。

協会の動き

昭和58年1月より
昭和58年8月まで

△昭和五十七年度▽

- 1月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭
- 1月21日 ローマ隣接権条約勉強会に参加 於国立教育会館
- 1月29日 義太夫教室講師打合せ会 於風月
- 2月3日 新春懇親会 於沢田本店
- 2月10日 常務理事会 於事務局
- 2月15日 定例理事会 於新小松
- 2月17日 昭和57年度民間芸術等振興費補助事業計画書提出
- 2月20・21日 伝承者研修発表会(義太夫節保存会主催・義太夫協会後援文化庁助成) 於本牧亭
- 2月22日 大会企画委員会 於新小松
- 3月6日 '83都民芸術フェスティバル 第13回邦楽演奏会に参加。紙治・寺子屋を演奏した。於第一生命ホール
- 3月7日 大会企画委員会 於新小松
- 3月9日 昭和58年度補助事業について事情聴取 於文化庁会議室

3月15・16日

ニッポン人の喜怒哀楽・語りもの世界(本多劇場主催・中村とうよう企画構成)に、土佐広・三生他が出演した。共演 人形劇団ひとみ座

3月16・17日

第6期歌舞伎俳優研修生発表会・第5回竹本講習生発表会 第6回竹本講習生試演会 於下北沢・本多劇場

3月20日

義太夫協会名簿'83発行 於国立小劇場

3月20・21日

義太夫協会公演会 竹本葵太夫が芸団協助成新人奨励賞受賞 於本牧亭

3月24日

芸団協第9回芸能功労者表彰式 竹本素八が受賞 於東京会館

24日

小林新吉追善義太夫会(義太夫協会協賛) 於本牧亭

3月28日

名韻会学生大会 義太夫教室第35期生が、柳・野崎を発表。補導出演―野沢吉平 指導―竹本綾之助 竹本弥乃太夫 於東横ホール

△昭和五十八年度▽

昭和58年度民間芸術等振興費補助金(青少年等芸術普及)実績報告書提出

4月9日

補助金額の確定通知

4月20・21日

義太夫協会公演会 竹本幸佳 改め竹本士佐恵の披露を行う。アンケート実施(9頁参照) 於本牧亭

5月5日

若手の自主公演「まゆの会」 於バモス青芸館

5月6日

NHK教育テレビ「邦楽百選」にて義太夫教室風景が紹介された。

5月13日

公演部々会 於新小松

5月20・21日

義太夫協会公演会 21日は、竹本素八の芸団協芸能功労賞受賞を祝う会 於本牧亭

5月23日

娘義太夫精進の会(鈴木一光・河野国声両氏後援) 於本牧亭

5月24日

経理部々会 於弥乃太夫宅

5月26日

定例理事会 於新小松

5月31日

義太夫教室第36期開講 42名応募 於銀座三丁目東町会事務所

31日

芸団協第17回通常総会 於航空会館

6月1日

昭和59年度民間芸術等振興費補助事業計画書提出

6月6日

若手懇談会 於事務局

6月11日

公演部々会 於新小松

6月20・21日

義太夫協会公演会 於本牧亭

6月27日 定例総会(4・5頁参照) 於文明堂
6月30日 大蔵省関東財務局により、民間芸術等振興費補助金実態調査行わる。

7月5日 定例理事会 於文明堂築地店

7月8日 常務理事会 於事務局

7月11日 学校巡演 由木中学校

7月20日 教師のための義太夫節講習会一日

本の音楽教育に於てなぜ邦楽が忘れられたか(ビデオ収録) 於本牧亭

7月21日 義太夫協会公演会 六時開演、四本立となる。 於本牧亭

7月26日 義太夫教室第36期閉講式 32名卒業 於銀座三丁目東町会事務所

7月27日 常務理事会 於吉川会長宅

8月10日 文化庁文化普及課 青少年等芸術普及事業助成金内示

8月12日 定例理事会 於新小松

8月20・21日 芸団協助成による"女流若手盛夏勉強会" 於本牧亭

8月22日 大会企画委員会 於新小松

8月26日 会報第28号発行

竹本土佐広師

おめでとうございます

昭和57年度人形浄瑠璃因協会賞

「本蔵下邸」の演奏に対し、この8月27日大阪市長・大島清氏より協会賞が贈られることになりました。

新風よんだ「まゆの会」雑感 (投稿)

寺澤正夫

薫風香る五月の空に躍動する若鯉のように、新進気鋭の勝手連が結束「まゆの会」と名付ける勉強会を開いた。時は端午の節句(子供の日)盛夏を思わせる快晴、場所も若人のメッカ・池袋駅に近いバモス青芸館である。

け、稽古熱心に取組んだ成果が生れていた。光秀の出からキリまで五十分以上の長丁場を立派に熱演、万雷の拍手がおくられた。それには終始力強い撥さばきも鮮やかな幸純さんのリードも大きく、勉強会として第一の収穫である。

「私達四人が義太夫を始めて十年たちました。入門先は違っても大の仲良し。互に啓発を受けつつ頑張ってきました。未熟者ばかりですが、皆様のお蔭をもちまして念願の勉強会開催の運びとなりました。ただただ精一杯に勤めますのでよろしくお願ひ申し上げます」という真摯な口上である。出演の太夫は、竹本越若、竹本越孝、竹本素丸の三君(メンバーの竹本素之助は休演)このアングラ劇場の舞台には幕というものがなく、赤い毛氈が敷かれ、見台とともにバックはすべて真黒、客席も勿論暗黒。折の音とともに出演者にスポットライトがあたり、力強い三味線で演奏が始まった。堅い長椅子に腰掛けて聞く義太夫節は、平常馴染みの本牧亭とは違った異色ある雰囲気であった。まず「絵本太功記」尼ヶ崎の段を素丸、幸純。繊細可憐、小柄な体軀の持主である素丸クンが、まあ、あの声量で、豪快な「太十」を語ろうとは、私共も想像外であっただけに逆に期待感を抱いたが、そんな杞憂をはねの

つぎの「菅原伝授手習鑑」四段目寺子屋の段は、前半を越若、後半を越孝両クンがこれまた十二分に研修を積んだ実力を発揮しての展開で、仙難クンの糸も効果をあげていた。出演者は僅か数人で、番組も少なかったが舞台はもとより裏方等すべての運営を出演者が交互に分担、最後まで手順よく運び、特に演者交代の出入りなど流石若手らしくキビキビと行動して大変良い印象をうけた。ただ開催日がゴールデンウィークの間に挟まれ、その上生憎審査会と重複したため、来会者が満席に至らなかったのはお気の毒であった。かくして、十年目の節目を迎えた同志が敢行した小さな冒険が今後の資産となり、更に一層の研修に邁進することを期待する。先般御大竹本土佐広師匠らが下北沢の本多劇場に出演したのを始め、中堅の太夫陣が交互に勉強会を開くなど、大いに義太夫節振興に努力しているが、この「まゆの会」も勉強会の成果を携え、各方面に進出することを希望するものである。(58年5月15日記・賛助会員)

義太夫節保存会主催

女流義太夫の今昔

— 娘義太夫から人間国宝まで —

9月29日 国立小劇場で開催

吉川英史義太夫協会会長が、かねてより提唱していた「女流義太夫の今昔」(義太夫協会会報第23号・56年7月刊、24号・57年1月刊、26号・57年10月刊)が、義太夫節保存会主催、文化庁・義太夫協会後援で漸く実現の運びとなった。

◇昭和58年9月29日(木) 6時15分開演

◇国立小劇場

◇指定席二五〇〇円 自由席二〇〇〇円

娘義太夫、女義太夫、そしてタレ義太夫などという有難くない呼び方——近年は女流義太夫、略して女義(じょぎ)と呼ぶことが多い。

江戸時代、女義は何回か禁止の憂き目に会っている。女義の大流行は、明治10年、寄席取締規則の改正により女の芸人が公許されてからのこと、明治20年代、30年代が全盛時代であった。感極まって「ドースル・ドースル」と声を掛けたため「ドースル連」と呼ばれるようになったという書生達をぬきに明治の芸能史は語れない。寄席から寄席へ眞の人力車の後押しをしてついて回ったというから、さしずめ今日のタレント親衛隊といったところか。芸の実力よりも若さや容色がもてはやされたとしても、女の芸人が珍しかった時代

背景を考えれば止むを得なかったといえよう。しかし、徐々に鑑賞眼も高まっていく。当時義太夫席に通った人に、高浜虚子、竹久夢二ら、若山牧水にも「ゆふまぐれ袂さぐれば先づこよい浄瑠璃をきく銭は残れり」という作品がある。日本画の大家・奥村土牛氏も寄席通いの時期があったと、過日、本牧公演の折になつかしんでおられた。

その昔の異常なまでの熱狂の余り、種々「伝説」も多く、今でも女義の場合「芸は二の次」と思われている節がある。57年、竹本土佐広が女義第一号の人間国宝になって以来、漸く再認識されてきたようではあるが、まだまだこの偏見は根強い。義太夫協会では本牧亭を本拠として、昭和25年以来定期公演を続けており(現在は毎月20日・21日)、その間後継者がなく何回か危機もあったが、今では20代、30代の若手が着実に育っている。

今回の公演では、明治から今日までの、いわば女義の全貌を御覧頂けることと思う。

一部へむかしの演奏

*かつては、殆んどが弾き語りであった。

「壺坂」の弾き語り

*いわゆる「ドースル連時代」の再現。太夫

はNHKテレビ「ハイカラさん」で娘義太夫を演じた竹本越孝、当時の髪形・衣裳で「太十」のさわりを語る。三味線 豊澤仙離

司会と話 三国 一朗

二部へ話

ドースル連よりやや時代は下るが、明治末〜大正期に娘義太夫として大活躍した、竹本伊達子(現土佐広)、竹本染登両師にその頃の話聞く。大阪や神戸の寄席で一緒に出演して以来、70年にわたる旧知というから、珍しい話が期待されよう。

聞き手 三国 一朗

三部へいまの演奏

かつての伊達子、現竹本土佐広は86歳、女義初の人間国宝。竹本染登はめでたく米寿、88歳、三味線の鶴澤三生は、現役女流三味線奏者の最長老で80歳、淡路人形と共に海外でも活躍している鶴澤友路は69歳。平均年齢81歳、いづれも現役、四人のベテランが本格的芸を聞かせる。

伊賀越道中双六

沼津の段

寿連理の松(お夏清十郎)

湊町の段

竹本土佐広 染登
鶴澤 三生
鶴澤 友路

続く「新版歌祭文 野崎村の段」は、重要無形文化財総合指定保持者、竹本素八・竹本春華・竹本駒竜・竹本朝重・竹本越道による掛合、三味線は鶴澤寛八。段切りには、在京の若手太夫・三味線が勢揃いし、昨年9月の手術以来の豊澤仙広も出演する予定である。

昭和58年4月実施
本牧公演アンケート

回収率 20日 56人中28人 50%
21日 91人中39人 42.9%
平均 45.6%

開演時間は (通常5時半)

早い 62.7% ちょうどよい 28.4%
遅い 0% その他・無回答 8.9%
○仕事のあと、ソバの一杯くらい喰いたい。
○6時ならば、勤め帰りに立ち寄りやすい。

終演時間は (通常8時半)

早い 3.0% ちょうどよい 83.6%
遅い 7.5% その他・無回答 5.9%

入場料は (通常1,300円)

高い 14.9% ちょうどよい 56.7%
安い 16.4% その他・無回答 12.0%
○良い演奏をきいた時は安いと感じています。その逆もいえます。
○まあまあですが、なかなか大変でしょう。

番組数は (通常5組)

多い 28.3% ちょうどよい 64.2%
少ない 0% その他・無回答 7.5%
○タタミに3時間座り続けるのは、とても疲れれます。4組くらいでよいと思います。
○休憩時間というものはないのですか。落ちついてトイレにも行ってられません。

解説 (あら筋・本文) は

活用 64.2% 活用していない 19.4%
その他・無回答 16.4%

会場の音響は

よい 93.3% 悪い・聞きにくい 6.7%
○電話の音が気になります。(多数意見)
○よく聞こえるが、外の雑音と電話がうるさい。
○客席のうしろの方で、舞台そっこのけで雑談にふける者あり。
○音も大事だが、舞台照明が悪い。スポットを。

演目は

ポピュラーなものがよい 28.4% 珍しいものも聞きたい 37.3% 無回答 34.3%

演目は

一人語りが多い 64.2% 掛合がよい 10.4% その他・無回答 25.4%
○掛合はたまにでよい。
○一人語りが一番面白いが、道行は掛合で。
○掛合はもうあきた。頭数ならべれば事が済んだと思われては困る。

その他の御意見

- 師匠はともかく若手の勉強不足が目につきます。師匠連の愛のムチを期待します。
- 企画性を重視されたし、例えば菅原の通し等。
- 病気休演・代演でがっかりすることが多い。
- あまり抜かないで下さい。
- 若手の出演回数を増すために、前後に分けて語るの如何? こうすれば時間は半分になるが賑かになる。
- 若い方は派手な肩衣で髪形は芸能人らしいものを。近代的なものには抵抗を感じる。
- 若いお客様に異和感を持たせない親しまれるスタイルの太夫が望まれます。
- 若手の出演者は派手に飾りたてるよりも、すっきりした舞台姿の方が好感がもてます。
- 関係者同士(?)の挨拶は、少くとも演奏中には慎しむべきだと思います。
- 写真・テープをとらせなくなったことは良いことです。
- 殆んど定連だけみたいですが、客層を拡げるPRを考えてみては……
- なるべくマイクは使わぬ方がよい。

敢えて耳の痛い御意見ばかり掲載させて頂きました。動んで参考にさせて頂くとともに、厚く御礼申し上げます。7月より6時開演、4本立、若手勉強のためミス内をつけることに決定、電話も開演中はベルを鳴らさぬ装置をとりつけました。番組の御希望は「通し」が圧倒的、新公演部の大きな課題です。

受賞おめでとうございます

*豊澤源平師(正会員) 3月21日
尼ヶ崎市文化功労章

*竹本葵太夫さん(正会員) 3月28日

第4回松尾芸能賞 舞台音楽新人賞

*加藤道子氏(特別会員) 4月27日

紫綬褒章

特別会費二口以上の方(敬称略)

(57年4月〜58年3月扱い分)

内野アキコ	57年度6口	三〇、〇〇〇円
菅 邦夫	57年度6口	三〇、〇〇〇円
池田 弘一	58年度4口	二〇、〇〇〇円
井上 一二	57年度2口	一〇、〇〇〇円
加藤 利一	57年度2口	一〇、〇〇〇円
景山 正隆	57年度2口	一〇、〇〇〇円
加藤 道子	57年度2口	一〇、〇〇〇円
品川 欣司	57年度2口	一〇、〇〇〇円
菅原 大常	57年度2口	一〇、〇〇〇円
高野 俊雄	57年度2口	一〇、〇〇〇円
藤田 昌子	57年度2口	一〇、〇〇〇円
松尾 武市	57年度2口	一〇、〇〇〇円
松前 重義	57年度2口	一〇、〇〇〇円
森 寿美	57年度2口	一〇、〇〇〇円
和田 博	57年度2口	一〇、〇〇〇円

普及部から

七月二〇日の教師のための義太夫節講習会は、日本の音楽教育に於て、なぜ邦楽が忘れられたかというテーマで行われましたが、研究熱心な先生方で大満員でした。当日の内容(吉川会長の講演、義太夫三味線の特色、土佐広・寛八の「宿屋」、八王子車人形の「大井川」)はビデオに収録してあります。ゆくゆくは貸出しできるように整備したいと考えています。

二ヶ月間の初級入門コースを終え夏休み中だった義太夫教室が九月から新学期を迎えます。語りコース、竹本素八師は五回目の講師、竹本春華師は初めての受けもちで、熱心な受講生を評して「可愛らしゅうて、可愛らしゅうて」——三味線コースの豊澤幸純師も教室講師は初めて、また女性講師第一号でもあり大いに期待されています。

ハ寄

贈

- 山中 豊氏 カセット資料 一部
- 河野国声氏 伊東深水リトグラフ「虫の音」
- 高野俊雄氏 義太夫協会会員名簿、83 八百部
- 長 乾二氏 辞典 二冊
- 鶴澤英治氏 三味線 一丁
- 三味線桐 三ヶ
- 番附・写真他多数

どうもありがとうございました。

計 報

- 鶴澤絃二郎師(正会員) 58年1月31日逝去 (歌舞伎義太夫の三味線奏者として、まだ活躍して頂きたかった方でした。歿後叙勲 勲五等双光旭日章)
- 伊藤丸文氏(賛助会員) 58年2月3日逝去
- 竹本雛昇師(正会員) 58年3月 逝去
- 豊澤田竜師(正会員) 58年4月1日逝去
- 竹本重之助師(正会員) 58年7月13日逝去 (56年9月の本牧亭「餅屋」が最後の舞台。美声で人気があった、東京の女流義太夫の最長老でした。享年九十一歳)

御冥福を心からお祈りいたします。

編集後記

1月20日付、第27号以来七ヶ月ぶりの発行です。総会終了後の会報ですから、決算報告を掲載しなくてはならないのですが、紙面の都合で次号になりますこと、おわび申し上げます。高野俊雄氏寄贈による83義太夫協会名簿の正誤表ならびに、その後の新入会、変更についても、紙面の都合上、別冊にて近いうちにお届けする予定です。どうか御了承下さい。今日までの本牧公演の存続は、ひとえに豊澤仙広元副会長の情熱と後ろ楯によるものです。同師に感謝すると共に敬意を表して、次号は特集を予定しております。新しい編集部初仕事、どうぞ御期待下さい。